



ららばい、通信

2026年
春号

特集
道しるべ



画 / 大野隆司

[目 次]

- 特集「道しるべ」
 - 仏教にたどり着くまで 植木 雅俊 …2
 - 日本の誇り(近代史)と未来への遺産 影山 好一郎 …6
- COLUMN / 右手は群馬県、左手は長野県 宮田 輝 …9
- 連載 / わらべうた 童謡 詞華抄14 東西「子どもの遊戯」続 竹馬 尾原 昭夫 …10
- 連載 / 子ども虐待は、今 性的虐待 川崎 二三彦 …14
- 連載 / 日本子守唄紀行 「月ぬ美しゃ」「耳切り坊主」 鵜野 祐介 …16
- 連載 有り難き哉 お不動さんの豆蒔き 帯津 良一 …18
- 連載 / 直島便り 崇徳天皇と一緒に 山根 光恵 …20
- 活動報告 …21
- 寄付者名簿

令和8年

ららばい通信 春号を
お手元にお届けさせていただきます。

ロシア、ウクライナ戦争は、もはや4年が経過し、いつ終わるとも先が見えない中、今度アメリカ、イスラエル対イランの戦争が勃発してしまいました。日ごろ戦争は愚かしい、してはならない行為といい、対話や外交での解決がなされるという世界の常識はまさに空手形、何一つあてになりません。

破壊、殺人、飢餓、非人道的な行いがいいわけがなく、高度に開発された兵器によつて的確に破壊が行われ町も人も犠牲になっていく様を、私たちはお茶の間にいて食事をしながらライブで現地の実況を見ています。

それこそ他人事、たびたび見ていけば風景のように当たり前に見えるほど戦争麻痺になり、チャンネルを変えればバラエティや歌番組に切り替えるものになってしまつています。考えればこの日常化は恐ろしいことです。

その瞬間、現地ではおぞましい戦火の下で破壊や殺人が行われ、逃げ惑う子供たちの姿が、泣き叫ぶ人たちの姿が映し出されているのです。ドラマではなく戦争の現実が遠い国で行われ、その映像は想像を絶する悲惨なものなのです。けれど私たちは映像から何を感じ、どう受け止めているか、そんなに深くは捉えていないのかもしれない。

テレビという日常の機械に鈍感になつていくことの怖さを感じてしまいます。戦争はしないと宣言した私たちに課せられた使命は、どう戦争を伝えるか、という時期になつていくことを痛感しています。

すでに戦争を体験している人はほとんどなくなつています。また聞きやその悲惨さが時に美化されたり英雄伝になつたり、伝聞や体験が虚飾やドラマティックになつたりとしていくこともままあります。戦争を語り継ぐことに慣れがあつてはなりません。

しかし、本当に戦争を体験した人は実は寡黙で、再現を拒みます。それほどの思いで生き延びた人にこそ残してほしい言葉があるのです。

ある日、突然命を断ち切られる人へ思いを馳せながら、自分事としてこれらの戦いを直視する心を私は持ちたいと想いながらテレビに對峙しています。なんの力にもなれない無力さをかみしめながら。

日本子守唄協会 理事長 西館好子

春の風

国見 修二（詩人）

分かれ道の地藏さまを
まつすぐに祈つた

まだ雪残る田んぼ道
走り出す子どもたちの声

（瞽女さまがいらしたぞ）

長い冬の暗闇を忘れて
瞽女も村人も心が開けた

詩集『瞽女―祈り』より



村人は春が来るのをずっと待ち望んでいた。
瞽女が春の訪れを知らせてくれた。

唄のページ

春の唄

「おぼろ月夜」

文部省唱歌

なの花畑に いり日うるれ
見渡す山の端 かすみ深し
春風そよ吹く 空を見れば
夕月かかりて においあわし
里わのほかげも 森の色も
田中の小道を たどる人も
かわずの鳴く音も 鐘の音も
さながらかすめる おぼろ月夜

「はりにゅうの宿」

訳詞：里見義
作曲：S.H.Bishop

はにゅうの宿も わが宿
たまのよそおい。うらやまじ
のどかなりや 春の空
花はあるじ 鳥はとも
おあわが宿よ
楽しとも たのもしや
ふみ読むまども わが窓
るりのゆかも うらやまじ
清らなりや 秋の夜半
月はあるじ 虫はとも
おあ わが宿よ
楽しとも たのもしや

「春がきた」

文部省唱歌

春が来た 春が来た どこに来た
山に來た 里に來た 野にも來た
花が咲く 華が咲く どこに咲く
山に咲く 里に咲く 野にも咲く
鳥が鳴く 鳥が鳴く どこになく
山に鳴く 里に鳴く 野にも鳴く

「緑のそよかぜ」

作詞：清水かつら
作曲：草川信

みどりのそよかぜ いいひだね
ちゅうちゅうもひらひら まめのはな
なないろばたけに いもうとの
つまみなつむてが かわいいな
みどりのそよかぜ いいひだね
ぶらんこゆりましょ うたいましょ
すばこのまるまど ねんねどり
ときどきあつむが のぞいてる

「さくら」

日本民謡

さくら さくら
やよいのそらに
みわたかすかざり
かすみかくもか
にあいぞ いずる
いざや いざや
みくに ゆーかん

仏教にたどり着くまで

仏教思想研究家 植木雅俊



対談を終えた植木さん(左)と西館理事長

西館 日本でのサンस्क리트語の権威、原始仏教から法華經に至る仏教思想の研究者でいらっしゃる植木雅俊さん。お会いするのを楽しみにしていました。

お会いするにあたり、植木さんの著書を片っ端から読ませていただきました。

自叙伝的な小説『サーカスの少女』（コボル出版）は童話風で、長崎県島原市での少年時代が生き生きと書かれていて、楽しく読ませていただきました。ところが、その先の仏教関係のものはいくら読んでも実はわかりませんでした。読めば読むほど難しい。

植木 おそらく、日本文化と異なる表現形態にとらわれると、そうなのかもしれません。私も初めて仏教を読んだ時の印象は似たようなものでした。インド的な言い回しや、表現の仕方が理解しにくさを助長しているのかもしれない。

例えば、バラモンから「お前の目玉が食いたい」と乞われて菩薩が自分で自分の目玉を抉り出すという話が仏典に出てきた時は、ついていけませんでした。それは、学生時代に学生運動家から議論をふっかけられて、答えられなくて、「お前は何も考えていないだろう」と言われて、自信喪失している時でした。確かに受験勉強でいい成績を取っていたけ

ど、丸暗記しているだけで、「自分で考える」ということが欠落していたからです。それによって、自己嫌悪に陥り、自己卑下して、ついには極度の鬱状態になりました。

そんな時、大学の寮に住んでいましたが、深夜に救急車が駆け付けました。担架で運ばれる学生の目玉が飛び出していました。学生運動の内ゲバで、カレイライスのスプーンを使って目玉を抉り出したと言っているのです。それを見て、ゾッとしました。そして、仏典の目玉を自分で抉り出した菩薩の話を思い出しました。目玉を受け取ったバラモンは、臭いと言って地面に投げつけ、足で踏んづけてしま

う。それを見た菩薩は、「俺がここまでしてやっているのに、何だー」と、菩薩道を退転した。痛かっただろうな——でも、それができた。なぜだろう。それは、「どうだ、すごいだろう。おれは、こんなことにも耐えられるんだ」という虚栄心が満たされている間は、肉体的苦痛にも耐えられる。虚栄心を踏みこむことによって、この菩薩の心が試された。

そのようなことに気づいて、私の生き方と同じだと思いました。あれだけ苦労して勉強していたのは、虚栄心からだったんだと気づきました。他人からどのように見られているのかということが、

私の生き方の根底にあったのです。この体験を通して、やっとその仏典の言わんとしたことが理解できました。

そんな時に、仏教学の大碩学である中村元先生の原始仏典の言葉「自己をよりどころとして、他人をよりどころとするなかれ。法(真理)をよりどころとして他のものをよりどころとするなかれ」に出会い、背伸びする必要も、自分をよく見せようとする必要もなく、自分らしく生きればいいんだと気づいて、楽になり、自己嫌悪と鬱状態を乗り越えることができました。

それで、仏教に関心を持つようになり、物理学と併せて二刀流で仏教書も読み漁るようになりました。みんなには、「私にとっての『ブツリ』の『ブツ』は、『物』と書くのではなく『仏』と書くんだ」と言っていました。

それ以来、独学で仏教学を学んでいました。でも、三十代後半に独学の限界にぶつかりました。サンस्क리트語も踏まえなければ、その限界を突き破れない。そんな時に中村先生との不思議な出会いがあり、中村先生が開設された東方学院で毎

週三時間の講義を受けるという幸運に恵まれました。

西館 そこでサンस्क리트語を一から学ばれて、サンस्क리트語から法華經を翻訳された。

植木 はい。中村先生の講義を受講して四年程して、中村先生から「博士号を取りなさい。日本は肩書社会です。植木さんがどんなに論文や本を出しても、肩書でしか評価しません」と言われて、仏教のジェンダー平等思想というテーマの論文を書いて、お茶の水女子大学に提出して、同大学で男性初の人文科学博士の学位を取得しました。その論文は、講談社学術文庫から『差別の超克——原始仏教と法華經の人間観』として出版されました。

その論文は、サンस्क리트原典が存在するのは、すべて自分で翻訳して引用しました。『法華經』もサンस्क리트語から訳しましたが、岩波文庫の岩本裕訳『法華經』上中下巻と比べると何カ所も違っていました。初めは私の勉強不足のためかと思っていましたが、調べれば調べるほど、私の翻訳が正しいことになりました。最終的に岩波文庫の四八九カ所もの致命的な誤りを指摘しました。それを筑波大学名誉教授の三枝充憲先生に話すと「自分で納得のいく訳を出しなさい」と言われて、全文を八年がかりで現代語訳して岩波書店から『梵漢和対照・現代語訳 法華經』上下巻を出版しました。それが、毎日出版文化賞に選ばれました。

その受賞者インタビューの記事を読まれた菅原文太さんが、「自分のラジオ番組『菅原文太 日本人の底力』にゲストとして招いて下さり、『法華經』『維摩經』について対談したのも懐かしい思い出です。

私の生き方の根底にあったのです。この体験を通して、やっとその仏典の言わんとしたことが理解できました。

そんな時に、仏教学の大碩学である中村元先生の原始仏典の言葉「自己をよりどころとして、他人をよりどころとするなかれ。法(真理)をよりどころとして他のものをよりどころとするなかれ」に出会い、背伸びする必要も、自分をよく見せようとする必要もなく、自分らしく生きればいいんだと気づいて、楽になり、自己嫌悪と鬱状態を乗り越えることができました。

それで、仏教に関心を持つようになり、物理学と併せて二刀流で仏教書も読み漁るようになりました。みんなには、「私にとっての『ブツリ』の『ブツ』は、『物』と書くのではなく『仏』と書くんだ」と言っていました。

それ以来、独学で仏教学を学んでいました。でも、三十代後半に独学の限界にぶつかりました。サンस्क리트語も踏まえなければ、その限界を突き破れない。そんな時に中村先生との不思議な出会いがあり、中村先生が開設された東方学院で毎

覚えさせ、見失っていた本当の自己を思い出させる『法華經』の譬喩物語を読んで、それは、まさに私のことだと、励まされました。

西館 「本来の仏教」である原始仏教と、『維摩經』『法華經』は密接な関係があるわけですね。

植木 はい。中村先生は、原始仏教の重要性を強調されていました。中村先生は、後世の神格化されたお釈迦さまや、権威主義に染まった教義、迷信やドグマなどを選び分けて、「本来の仏教」「人間ブツダ」の実像を探求していました。本来の仏教の探究という意味で、原始仏教と『維摩經』『法華經』の間は一貫するものがあると思っています。

子守唄と仏教
子守唄の源はサンस्क리트語？

西館 仏教を日本に広めたのは聖徳太子、現に、『聖徳太子伝』には太子は幼児期に五人の位のある女性たちによって子守唄を歌われ、眠らされていたと記載されています。

さてそこで、仏教と子守唄には何らかの関係があるのか、という懸念が生まれました。子守唄と名付けられた原点が仏教と思ったら、歌詞の冒頭にかかる言葉が「ねんねん・ころりよ」で、念仏の「ねん」かと気になりました。

多くの方に伺ってみました。「寝ん寝ん」「ねんねん」「ネンネン」と時代によって書き方も変わっていくようですが意味はとにかく赤ちゃんを眠らせる目的の呪文みたいなもの、ということでした。

その語源がどこかと言えばインド発祥のお釈迦様の言葉にあるのかと思いましたが。現にサンस्क리트語と明言するインド人もいました。それ本当ですか？

植木 サンスクリットではないと思います。
西館 インドでは子守唄のことを総称「ローリー」(Loli)と言います。「念々」は安らかに、「ローリー」は安らかにといった意味とか。

安らかにやすみなさいといった、赤ちゃんがこの世に生まれるという誕生と老いて死ぬ最後に、安らかにやすみなさいは共通用語に思えたのですが。

協会の初代会長の詩人松永伍一さんは子守唄を「命の讃歌」と位置付けているのですが、尼僧たちの体験を集大成した手記詩集『テリー・ガーター』(角川選書)を植木さんは現代語訳されていますが、そのサブタイトルに「尼僧たちのいのちの讃歌」とあり、これも気になりました。

植木 インドには、近年の国勢調査でも約二百六十という多数の言語があるため、地域ごとに子守歌の名称が異なりますが、北インドでは「ニ」が圧倒的に一般的です。これは、ヒンディー語、ウルドゥー語、パンジャービー語、ベンガル語で共通して用いられています。その語源は、「lor / ul / ula」のように「ゆらゆら揺らす」「あやす」「寝かしつける」という動作を表す擬態語・擬音語に由来すると言われています。これは、英語の「lull (あやす) や lullaby (子守歌)」と同じ発想で、世界の多くの言語で「子守歌」を指す言葉は、「揺らす音」「あやす声」から派生する傾向があるようです。

仏典に出てくるサンスクリットの単語を収録した『梵和大辞典』には、「lon」という項目はありません。サンスクリット語には、「子守歌」を一語で表わす言葉はありません。近い言葉としては、複合語として「ドーラ・ギター」(dola-gita)、あるいは「ニドラー・ギター」(nidra-gita)があります。前者は、「揺りかご」(dola)の歌(gita)で、後者は、「眠り」(nidra)の歌(gita)です。

ガンジス河で沐浴も体験しましたし、霊鷲山にも登りましたし、仏跡も歩きました。そんなことより、アグラのそばの何とかいう旅館に泊まった時、洞窟に温泉があるというので、ついでに飛んでいきました。地下にある円筒型の洞窟で、ぬるい湯につかっていて周りを見渡しましたら、岩の間にたくさん蛇が長く横たわっていました。もうびっくりして飛び出してきました。

旅館の部屋は回廊を囲んで並んでいて、真ん中に中庭が設けられています。暗くなったらそこに小さな蛙がゲロゲロ泣いて出てきます。「部屋から出ない方がいいですよ」と言われていましたので出ませんでしたが、静かになったと思ったら、蛙が蛇に(?)食べられていたのです。青木さんは、その様子を見たそうで「儀式だった」と言っていました。翌朝、庭はクジャクの美しい羽根が風に舞っていましたので、私も知らないから羽を土産にしようと思いましたが、なんと、クジャクは蛇を食べに来たというので腰を抜かさんばかりでした。クジャクの餌は蛇だったのです。

一晩で蛙から蛇、蛇からクジャクへと命の循環(食物連鎖)が行われていたのです。本当に命の儀式と思いました。いろいろ変な体験をインドでしました。また何度でも行きたいです。

植木さんのインド体験、ご本ではもう盛り沢山すぎるほどにいろいろありますが、何かこれということお聞かせいただけますか？

植木 中村先生は、「インドに行かないインド学者」を痛烈に批判されていました(植木著「今を生きたるための仏教100話第四話参照」)。現地に行かなければ、憶測で論文を書くことになる。勘違いも起ります。

私は、インドへ行ってたおかげで、『法華経』『維摩経』をサンスクリット語から現代語訳する際に助

現存する最古の原始仏典とされる『スッタニパータ』に、「慈しみ」という経があり、

いかなる生物生類であつても、怯えているものでも強剛なものでも、(中略)目に見えるものでも、見えないものでも、(中略)目に生まれたものでも、これから生まれようとするものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。(中略)あたかも、母が己がひとり子を命を賭けても護るように、そのように一切の一切の生きとし生けるものどもに對しても、無量の(慈しみの)こころを起すべし。

(中村元訳『ブツダのことば』、三七〇―三八頁)

仏教においては、「慈悲」、すなわち「慈しみ」(metta)と「慈」と「同情」(Karuna)と「悲」が重視されてきました。その実践を、母の子に対する無償の愛情を引き合いに出して説かれています。仏教で「子守歌」に關しての言及はないかと思いますが、その心は同じであつたと言えます。

仏に對する思いも、生命を慈しみ育む思いも、自然の発露として祈りとなり、それぞれが經典読誦となり、子どもに語り掛ける歌となつていったのではないのでしょうか。いずれも「いのちの讃歌」として大いに共通しているのではないのでしょうか。

西館 まあ、私の思い込みもありますが、「念々ころり」の安らかにやすみなさいの意味を「生と死」、生涯を通して初めと終わりの祈りとしての仏教に重ねて「子守唄」を考えてしまつてゐるわけであくまでも私感なのですが……。

植木 無理に「念仏」の「念」につなげる必要はないと思います。「坊やはい子だ、寝んねしな」の「寝んね」に「ん」を付けたものでいいような気がします。「念念」は仏典では「瞬間瞬間」「瞬一瞬」という意味になりますから。

けられました。チベットで発見されたサンスクリット語の『維摩経』写本に書写の際の誤写があつて、その解説が謎とされていたんです。その箇所は、支謙、鳩摩羅什、玄奘の三人とも「護」と漢訳しています。ところが、その誤写の箇所が、全くその漢訳とは結び付かないのです。

その時、アグラからニューデリーまでの急行列車に乗った際、隣り合わせた老人男性が腕にリボンのような紐を結んでいたのを思い出しました。聞くと、姉や妹が、弟か兄の腕につけてやる「お守り」のラクシャードラというので、その祭り(ラクシャードラ)の時期だったのです。そのことを思い出して、「護」と「守り」の共通性に気づきました。すると、その誤写の箇所は「ラクシャードラ」(rakṣā)の派生語に似ていたのです。こうして、その箇所を正して出版することができました。

これは、あの時の「ラクシャードラ」に守れたと思えません。

西館 最後に私たちに縁の深い仏教のこれからを教えてくださいませ

植木 中村先生は、世界的な仏教学者でしたから、世界中からいろいろな学者・文化人が訪ねてこられました。そのたびに、私たちにその方の話を聞く機会を作ってくださいました。

その一人に、タゴール大学学長のバッタチャリヤ博士がおられます。その方が、タゴールの言葉として「二十一世紀は、仏教が目される時代になるでしょう」と話されてきました。今、世界は分断と対立が深刻化する時代になりました。その対立を乗り越える方途は、一神教的思想に求めることはできず、仏教の空・不・中道の思想に基づくしかないと思つています。「中道」とは、直訳であつて、「至要之道」(最も適切な道)と意識されました。対

インドへの旅

西館 植木さんは、実際にインドに行かれて、「人間主義者」ブツダに学ぶ―インド探訪(学芸みらい社)というインド旅行記を書かれています。その本を送っていただいたので、夢中で拝見しました。私も四回インドに行き、旅先が重なっている場所が多く、懐かしくもあり、思い出することも多々あつて、一気に読み切りました。

ブツダの足跡を訪ねてという目的の旅は、わたしたち北の方ですね。ペナレスを中心に歩きました。最初は浄土宗の事務総長(当時)をなさっていた藤木雅雄住職と、詩人で作家の青木新門さんと三人旅でした。青木さんの著書『納棺夫日記』(桂書房)を映画化した『おくりびと』が話題になってきたころです。青木さんは超売れっ子、各宗派から講演の依頼が後を絶ちませんでした。おこぼれにあずかつて、天台宗の比叡山、浄土宗の知恩院、真言宗の高野山、曹洞宗の永平寺を訪ねる機会もありました。お釈迦さまを訪ねての旅は、必然的欲求だったのです。

インドは一度行って病みつきになる人と、二度と行きたくない人に別れると言われています。わたしは、デリーに降り立った瞬間から好きになりました。

今から10年も前の話ですが、一種独特の匂いの中で、子ども達が束になって両手を差し出し、物をいしていた様子は衝撃的でした。まずは人の多さにもびっくりでした。

特に印象的だったのは「ココにはなんでもある」ということでした。ひっくり返るようなエネルギーが町からも人からもあふれていました。雑多なものと喧騒と、何か戦後の浅草に似たものを感じて懐かかったです。

立を超えて、人間、生命を重視して物事を適切に判断する立場です。

また、これからAI(人工知能)の発達で、人間のやる事がごとく取って代わられることになりかねない状況になっています。人間として生きることの意味が根底から問われる時代になることでしょうか。仏教は、その人間存在を直視して、いかに人間らしく生きるのかということを説いたのが本来の仏教でした。身の回りの仏教を見ると、お釈迦さまも「私はそんなことはいっていない」と言われるのではないかと思うほどに迷信じみたものが多いように見えます。今こそ、「本来の仏教」に回歸すべきだと思います。



植木雅俊 プロフィール

1951年、長崎県島原市今川町生まれ。仏教思想研究者。91年から東大名誉教授・中村元氏に師事。『梵漢対照 現代語訳 法華経』上・下巻(岩波書店)で毎日出版文化賞受賞。『梵漢対照 現代語訳 維摩経』(同)でパピルス賞受賞。現在、NHK文化センター講師など多岐にわたり活躍。日本ペンクラブ会員。

日本の誇り(近代史)と未来への遺産

—日本の安全と平和のために—

影山好一郎

影山好一郎 プロフィール

防衛大学校本科(第9期)及び研究科(第8期電子計算講座)卒業。
1971年海上自衛官として自衛艦あづま艦長付、海上幕僚監部防衛課にてP-3C導入担当、豪国統幕学校学生、第二航空群支援整備隊司令、防衛研究所戦史部主任研究官、防衛大学校教授、図書館長、帝京大学文学部史学科教授等を経て2012年退職。軍事史学会顧問。



私は常々、日本の政治家や主要なリーダーの外交・軍事に関する言動は、どこか影が薄く、自信に欠け、ことに国の安全に対する関心や議論も希薄で、熱意にも欠け、あたかも他人事のように受け止められている気がしてならない。何故だろう。そこには日本人でありながら、決して派手ではないが、「いぶし銀のように輝いている日本文化・伝統」に対する価値に無頓着で、誇りを見失っているからではないだろうか。人は自分への理解と自信を持つことが重要である。

昨今の日本が予断を許さない中途半端な立ち位置にあることを認識し、民主主義国家日本の安全と平和のための具体的かつ有効な政策の推進が

強く望まれる。

ゆえに、世界に感動を与えた誇るべき日本の7つのエピソードを簡潔に紹介するとともに、先の日米戦争の開戦に至らせた三つの構造的な原因を併せて考えることによって、はじめて説得力のある「未来への遺産」とすることができるよう思われる。

日本近代史上の誇りとなる7つの史実

①トルコ軍艦エルトグルル号の海難と将兵の救助送還

明治20(1887)年、小松宮彰仁親王がヨーロッパ訪問時にトルコ皇帝から厚遇を受けたことへの返礼として、翌年、明治天皇が親書と贈り物を送った。これに対しトルコ皇帝は軍艦エルトグルル号を日本へ派遣したが、帰途の明治23(1890)年9月、和歌山県沖で台風に遭い座礁、587名が死亡する大惨事となった。地元漁民たちは台風シーズンで食料が乏



エルトグルル号

しい中でも救助や看護に尽力した。この日本人の真心はトルコ国民に深く記憶されている。95年後の昭和55(1980)年、イラン・イラク戦争でイランに取り残された日本人を、トルコ政府がエルトグルル号の恩義を理由に救援機で救出し、215人が帰国した。現在もこの出来事は日トルコ友好の象徴として語り継がれている。

②日露戦争の勝利が世界に与えた影響

日露戦争(1904～1905年)は、ロシアの南下政策に対抗するため、日本が英米の支援を受けて戦い、圧倒的勝利した。ロシアはバルチック艦隊を派遣するも、長距離遠征で燃料・物資の欠乏、精神面の疲労、戦術劣勢や日本海海戦で敗北した。この結果、欧米列強の一つであるロシアがアジアの日本に敗れたことで、世界に大きな衝撃を与えた。アジアやアフリカでは植民地支配からの独立運動が高まり、中国の辛亥革命など各地の民族運動を刺激した。このように、日本の勝利は多くの有色人種に独立への希望を与え、世界の民族運動に大きな影響を与えた。

③明治に生きていた相手(敵国)を敬う日本武士道

江戸時代、武士は戦う存在から社会の模範となる指導者へと変化し、礼節・献身・勇気・主君への忠義を重んじる武士道が形成された。山鹿素行は「主君が道を誤れば諫め、受け入れられなければ去るべき」と説いたが、山本常朝は「暗君でも一生仕えるべき」と説き、忠義の考え方には違いがあった。この思想は幕末の志士たちにも影響を与え、明治国家の形成につながった。日露戦争では、東郷平八郎や乃木希典らが敵将や捕虜に敬意をもって接し、その武士道的精神は世界から称賛された。また日本はロシア兵や第一次世界大戦のドイツ兵捕虜にも人

道的に接し、国際的な評価を得たのであった。

④第6号潜水艇の遭難と佐久間艇長の倫理観

日本は日露戦争後の新兵器の一つとして、米国内から潜水艇を7隻導入し、2隻を国産化した。1911(明治43)年4月15日、その第6号艇が新たな研究開発の基礎データを収集すべく、半潜航試験(いわば煙突で空気取り入れ口(スノーケル)を半ば海面上に出したまま潜航する試験)中に機械の不具合で浸水し、佐久間艇長以下14名は全力を尽くすも、浮上できないまま艇内で死亡した。

佐久間艇長は最後まで事故の原因や経過を手帳に記し、将来の潜水艇開発に役立てること、部下の遺族への配慮を願う言葉を残した。発見時、乗員は誰一人取り乱すことなく持ち場を守ったまま亡くなっており、その姿は大きな感動を呼んだ。夏目漱石や与謝野晶子もその精神を称えたのである。この事故の衝撃的な情報は世界を駆け巡り、深い感動を与えた。



佐久間勉艇長

⑤第二特務艦隊の英国将兵の救助

第一次世界大戦(1914～1918)／大正3(1914)年、同盟国であるドイツによる無制限潜水艦作戦により英国が国家破滅の危機に陥ると、日

本は日英同盟に基づき艦隊を地中海へ派遣した。1917(大正6)年、日本の駆逐艦は撃沈された英輸送船の兵士約1800人を献身的に救助し、英国議会では「万歳」と称賛され、ジョージ5世から勲章が授与された。

その後も日本艦隊は護衛任務を続け、日本駆逐艦「神」が戦死者59名という損害を受けながらも連合国の勝利に貢献した。この功績により、日本は戦後五大国の一つとなり、国際連盟の常任理事国となった。ジョージ5世、海軍大臣チャーチルをはじめ、イギリス国民の日本に対する感謝と敬意は深く日本の歴史に刻まれたのである。

⑥ワシントン会議のステーツマン加藤友三郎

広島藩の武士の家庭に生まれた加藤は、藩校修道館で学び論理的思考を培った。海軍兵学校卒業後、現場での経験を重ね、日清戦争では砲術長として活躍、日露戦争の日本海海戦では連合艦隊参謀長として司令官長 東郷平八郎を支え、勝利を収めた。戦後の厳しい財政再建が求められる中で、海軍次官・海軍大臣として八八艦隊構想(列強と対等な関係構築を目指す艦隊の整備計画)を掲げたが、ワシントン軍縮会議では国際協調と財政を重視し軍縮条約に調印。強い反対を抑えつつ対米関係改善と国際安定を図り、後に首相として陸海軍の軍縮やシベリア出兵撤退を進めた。このように加藤は、国力と国際情勢を見据えた判断で軍縮と外交を推進した海軍軍人・政治家であった。まさに日本・日本人の誇りである。

⑦日米開戦後の日本駆逐艦「雷」の英・米国将兵の救助

1942(昭和17)年、日本海軍は真珠湾作戦をはじめとする南方作戦で優勢に立ち、スラバヤ沖・

バタビア沖海戦で連合艦隊に大打撃を与えた。その際、駆逐艦「雷」の艦長・工藤俊作は、沈没艦から漂流していた英米兵422名を救助し、敵兵を敬い厚遇した。この行為は武士道精神として世界的に称賛された。

救助された英国人サー・フォールは戦後外交官となり、この体験を語り続け、日英関係や反日感情の緩和にも貢献した。

未来への遺産

以上の7つの事案は、長い歴史を通じ、日本文化・伝統の一環として、素直に表現されたものであり、そのような先人たちの誇りに思い、その未裔であることに自信と信念をもって生きなければならぬと思われる。

では、昨今の大国のエゴや永年の報復連鎖の關係国によって交際社会が、まさに無秩序化され、不安が増す中で、日本・日本人は如何なる国是・国策のもとに、どのような手段を以て国際社会に臨めばよいのであろうか。

真の国民的な誇り

真の国民的な誇りとは、プラス面のみではなく、マイナス面(過去の失敗や反省)を直視し、それを教訓として統合することで生まれるといえる。

戦前期の近代化の過程は、計らずも開戦への道でもあった。背景には、明治憲法体制の未成熟、日露戦争後に設定された大陸政策、そしてそれを支えた陸海軍という三つの構造的要因があった。また、日清・日露戦争の勝利による「おごり」や対外的な高圧姿勢も、対中・対米関係の悪化を招いた要因であった。いずれにせよ大東亜戦争終結後の新生日本は、

COLUMN

「右手は群馬県、左手は長野県」

県境の権現さん

拜殿で柏手(かしわで)をうつと、右手が群馬県、左手が長野県という神社がある。碓井峠のてっぺんにある権現さんだ。

国道十八号線にも碓井峠があり県境になっているが、ここでのいうのは旧中山道の難所だった碓井峠。

鉄道にしたって、急こう配の碓井峠をのぼるのに、横川の駅で電気機関車をつけ足している。いきおい停車時間が長くなり、おかげで、ホームでそばを食べたり、釜めしを買ったりすることも出来るけれど。むかしの旅びとは、エッチラ、オッチラ、歩いてのぼり、峠に着くと、「やれやれ、ひと休み」と、甘いものでも食べたのだろう。

いまも、旧中山道の峠には、「ちから餅」なんて看板の店がある。「上信国境」と刻んだ石が立ち、そのまん前がお宮さんだ。

石段をのぼると、まん中に本宮さん。右側が群馬県松井田町の新宮さん、左側は長野県軽井沢町の那智宮さん。

そして、本宮さんのまん中が、県境になっている。だから、柏手をうつと、二つの県にまたがることになる。

「パチン！、パチン！」と両県に響く。
宮司さんも、上州側、信州川と、二人おいでになる。

本の紹介

「別冊太陽石垣りん」

木瀬公二(元朝日新聞記者)



昨年9月ごろ、平凡社から「別冊太陽石垣りん」の原稿執筆の依頼を受けた。編集部は「素顔の石垣りん」をイメージしていたが、素顔なんて顔を洗えば出てくる。そのもつと下の「生身」を書くのが私の役目だと思っていた。本文中にも出てくるが、茨木のり子さんに「石垣さんのことは何でもメモに残しておいてね」と言われていたので、材料はたくさんあった。むしろどれだけ削れるかだ。

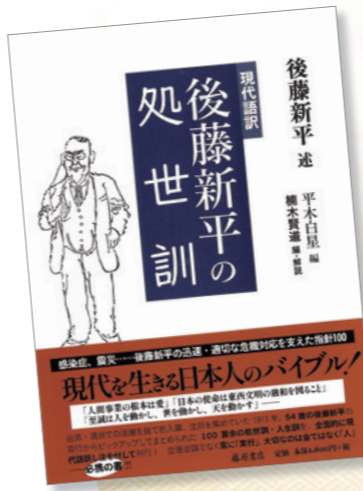
私は現役時代、力を入れた原稿は長さを気にせず「削れるものなら削ってみろ」とデスクに出していた。デスクと筆者の勝負である。でも締め切り間近にそれをやる混雑させるだけだ。早めに出して「こ

れは削れない」と思わせて後から出てきた方の原稿を削らせるようにすればいい。その手法を頭に描いて、りんさんの原稿を書いた。締め切りは12月中旬。それよりひと月早く出すと決めた。自分の日記や資料箱をひっくり返し、何とか「これならりんさんも許してくれるだろう」という原稿に仕上げられたと思えた。注文の10倍を超える1万2千字強。削られることもなくそのまま掲載された。

「後藤新平の処世訓」

藤原書店

日清戦争後に割譲された台湾経営に手腕を振るい、初代満鉄総裁としても活躍をした後藤新平。その後通信大臣として初入閣。世間から注目を一身に集めていた一九一一年(明治44)年、五十四歳の後藤新平の言行から、当代きっての詩人平木白星がまとめあげた百篇余の処世訓・人生訓を、全面的に現代語訳し注・解説を付して、今月刊行。空理空論でなく常に「実行」、大切なのは金ではなく「人」——万人必携の書である。



元NHKアナウンサー 宮田輝

神社の前の店で、「こちらは何県ですか?」と聞いてみると、「両方にかかっているんで、固定資産税なんか、長野県と群馬県の両方に払っています」とのこと。

厄介なこともあろうが、海拔千二〇〇メートル、峠のてっぺんはながめがいい。赤城、榛名、妙義の山々をはじめ、関東平野一帯がみえる、と峠の人はいう。

五月十五日のまつりのころになると、落葉松(からまつ)が芽吹きはじめ、県境にも若葉の候がやってくる。

真夏の、うだるような暑さをさけて、軽井沢で憩うのもいいが、景色がいいのは、何とんでも芽ぶき時だね、と地元の人はおっしゃる。

県境ではないけれど、長野県には、ほかにも変わった例がある。

信越線を、軽井沢からさらに一時間ばかり長野寄りに、戸倉という駅があるが、ここで降りたところが戸倉上山田温泉。

賑(にぎ)やかな湯の町で、旅館やら土産物店が軒をつらね、どこまでが戸倉町で、どこからが上山田町か、ちよつとはわからない。

ながめのいい城山へのぼっても、あれが境界と、はつきりはしない。
町なかの、それらしいあたりへ行ってみた。
「大体、この辺が境のはずです」という案内で、

ある理髪店をたずねると、「うちは境界にあるんです。このイスは上山田、こっちのイスは戸倉になるんですね」と。

この店は、戸倉と上山田、両方の町にまたがっているのだ。

町の境の二つのイスのあいだに立つと、一人で、いつべんに二つの町にすることに。またこの店の人は、往ったり来たり、一日に何回も二つの町を往復していることになる。

また、四、五段の道をはさんだ真向いのお菓子屋さんでは「うちは、ここは戸倉ですが」と、おせんべいの瓶(びん)のふたをおさえた。

となりのかりんとうの方は上山田とか。ここは、町がちがうだけでなく、郡もちがう。戸倉町は埴科(はにしな)郡、上山田町は更科(さらしな)郡だ。

電話も、かつては、家は向いあつていても局が異なつて、申し込んでから通じるまでに何時間もかかる、という珍現象があつたが、このころはもう、一つの局になり、ダイヤルともなつて便利になった。

全国にはいろいろなお店がある。静岡県には、まわり中を浜松市にかこまれたようなところに、ボツと二つの村がある。浜名郡可美村だ。

世の中、いろいろと事情があつて、なるようになって。旅をすると、教えられることが多い。

ちなみに、ここにあげた三つの場合は、県や郡、市や村が異なつていても、郵便局は同じだった。



1970(昭和45)年4月29日
毎日新聞社発行 新聞記事より

東西「子どももの遊戯」続竹馬 わらべうた童謡詞華抄 14

わらべうた研究者 尾原昭夫



木馬(玩具) 北尾重政画
『江都二色』
安永2年(1773)

ブリュネゲルの「子供の遊戯」について

今年「午歳」。まずは馬にちなむ遊びや玩具をとりあげたいと思う。日本の子どもの遊びを図像学的に変遷をたどるなかで、室町後期の戦国時代に、はるか離れた欧州の一隅で描かれたブリュネゲルの「子供の遊戯」との比較を通して、グローバルな視点から、洋の東西の子どもの文化の共通性また相違、交流などを検討し、そこから人間としての普遍性や知恵、民族の歴史と独自性などを探るきっかけを見出すことができないか、というのがねらいである。

まず、前回の最後のページに掲げたブリュネゲルの世界的に有名な絵画「子供の遊戯」について説明しておかなくてはならない。現在

はウィーン美術史美術館所蔵ではあるが、その題材はネーデルラントのアントウエルペンのものでされる。ネーデルラントは現在のオランダ・ベルギー地方の北海に沿う低地地帯。そこは、時代はくだるが、かの「フランダーズの犬」、少年ネロと老犬パトラシエの物語のイメージに近い地域である。ブリュネゲルは一五二五年から三〇年頃の間、ネーデルラントの一農村に生まれたという。不朽の傑作「子供の遊戯」は、ブリュネゲルのアントウエルペン滞在期の一五六〇年に描かれた。それはわが国の室町後期永祿三年、將軍足利義輝の時代、ちやうど織田信長が桶狭間の戦いで今川義元を討ち取った年に当たる。今から五〇〇年ほど前の中世の時代に、何と一枚の絵に、男一六八人、女七八人、合計二四六人も子どもを登場させ、描かれた遊びの数は九一種という、そのテーマのじつに独創的で壮大、網羅的・百科全書的な着想には、まさに驚きと敬意を感じざるをえない。美術史・図像学の権威で明治大学名誉教授の、筆者がかつてある雑誌で対談をしたことのある森洋子氏は、その力作『ブリュネゲルの「子供の遊戯」―遊びの図像学―』（未来社）において次のように述べておられる。

「このように数多くの遊びを収集するという発想は、ブリュネゲル個人のものであるにせよ、作品の注文者によるものにせよ、きわめてアントウエルペンの的といえよう。国際商業都市として繁栄したこの都市の住民たちは、日常において世界各地からのあらゆる情報を享受することができた。だがこうした異文化との接触によって、逆に自国の民俗的な伝統を強く意識し、それを絵画で伝え残す意味を考

えるようになる。国際化によって人は、かえって母国の文化の存在を認識するのである。アントウエルペンは、若いブリュネゲルを好奇心の強い人間として、人文主義的教養をもつ画家として育てた都市でもあった。アントウエルペンでの生活体験や知識人との交遊なくしては、この「子供の遊戯」は生まれなかつたであろう。

「子供の遊戯」を描いたときのブリュネゲルはまだ結婚しておらず、したがって子供もいなかった。ゆえにブリュネゲルは自分の子供の遊びを通して観察したというのではなく、すでに三〇歳か三十五歳位になった画家は、これまで町の広場や道路で遊ぶ子供を見た記憶から、あるいは知友たちとその当時の遊戯を収集し、それを描いたのである。」

なお、以下、画中の各個別の遊戯名も同書から引用させていただく。日本の子ども遊戯の図版を種類別におおむね時代順に排列して、時代の流れに沿う遊びの態様の変化・変遷を見ることができるよう配慮し、その間にブリュネゲルの「子供の遊戯」から関連する遊戯を抽出・並列して、まずは東西を「目で見て」比較することで、読者の興味・関心を引き起こすようにしたい。

西行

春駒型の竹馬



竹馬 『法然上人絵伝』より
鎌倉時代後期 続日本の絵巻 中央公論社



春駒 静斎英一画
『幼稚遊昔雛形』
江戸後期 天保15年(1844)



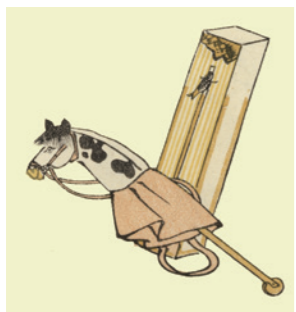
竹馬
『沢庵巡礼鎌倉記』
江戸前期 万治2年(1659)



春駒と腰付馬 西川祐信画
『絵本西川東童』
江戸中期 延享3年(1746)



棒馬 P.Brueghel画
『子供の遊戯』
1560



春駒と鯉の滝登り 北尾重政画
『江都二色』
江戸後期 安永2年(1773)



竹馬(春駒)
『小兒必要養育草』
江戸中期 元禄16年(1703)



竹馬 小寺玉晁画
『尾張童遊集』
天保2年(1831)

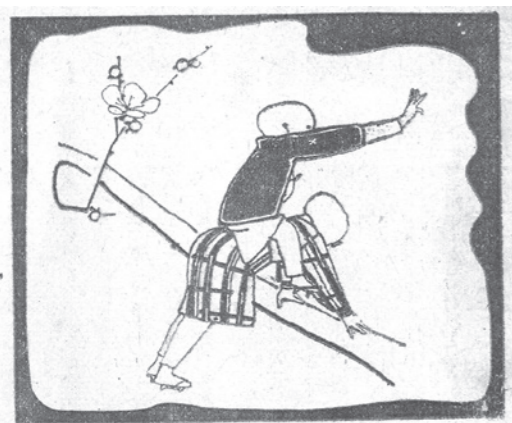


竹馬 歌川豊国画
江戸後期



竹馬と竹杵 辰景画
『絵本竹馬之友』 江戸後期 天保頃

鹿鹿角何本 柳田國男著
『こども風土記』
昭和17年(1942) 朝日新聞社



お馬 鮮斎永濯画
『吾妻余波』
明治18年(1885)



馬乗り 津田久英画
『江戸遊戯画帖』
江戸後期 横浜歴史博物館

馬乗り遊び

線の上での引っぱりっこ
P.Brueghel画『子供の遊戯』1560



牡山羊牡山羊よ ふらつくな
P.Brueg.『子供の遊戯』1560



春駒 歌川国貞画
『初春子供遊』江戸後期



春駒と竹馬 鮮斎永濯画
『吾妻余波』明治18年(1885)

竹馬 二本竹
『絵本大人遊』江戸後期 寛政5年(1793)



竹馬
『福富草子』室町時代前期
喜多川筠庭『筠庭雜考』より

低い竹馬 P.Brueg.
『子供の遊戯』1560



高い竹馬 P.Brueg.
『子供の遊戯』1560



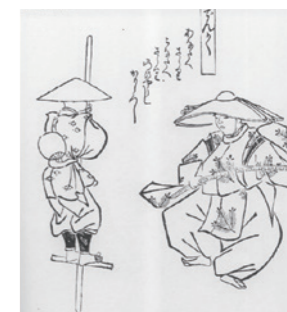
春駒と糸引馬 辰景画
『絵本竹馬之友』江戸後期 天保頃

(詞書)

「おめへハかじはら おれはさゝき うじがわのせんじんだが よしか」
「おれハちみちのるから マアさきへのりな」
「おれハよしつねだから 一ばんきつい」

高足型の竹馬

兵庫県加東市の上鴨川住吉神社の秋祭りに行われる神事舞(重要文化財)の一つに「田楽」があり、その中に「高足」がある。田楽は古くから行われた芸能で、元は早乙女が集団で田植えをする際に、豊作を祈って歌・太鼓・笛・さらなどで囃しながら田の神をまつる、今でも広島県の山間部などに行われる「囃子田」といった芸能の類で、それが平安中期から室町時代にかけて流行した。やがて専門の職業としての「田楽法師」が生まれ、散楽系統の「品玉」「高足」などの曲技をとりこんで各地の神社の祭礼で演ずるようになった。図のごとく、丸い棒の中ほどに横木をつけた一本足のものに乗って飛び跳ねる芸。それを子どもたちが真似て、より安定した「二本竹」の「竹馬」にし、足がかりには時代によりいろいろ工夫を重ねてきたことが、以下に提示する多くの図によりわかる。とはいえ、その竹馬の歴史は世界的にははるかに古い歴史を秘めていることがブリュゲルの絵、また森洋子氏の研究からわかり、子どもの遊戯について探求の眼をより一層広げていかなければならないと痛感する。



田楽の高足 菱川師宣画
『和国諸職絵つくし』
貞享2年(1685)

子ども虐待は、今

性的虐待

子どもの虹情報研修センター

川崎 二三彦

うした状況はここ数年変わらない(表)。では、私たちの社会では、性的虐待はそれほど多くないのであるうか。

日本の児童虐待重大事件2010-2020
話は変わるが、私は最近、『日本の児童虐待重大事件2010-2020』を編著者として上梓した。2010年代に発生し、社会的な関心を集めた虐待死事件等を中心に20例以上を抽出し、それらの詳細を記録したのである。子どもが被害に遭う事件というのは、記録するだけでも胸が苦しくなるのだが、こうした事件を少しでも減らすためには、実際に起きた出来事を直視する必要があるからだ。これらを眺めていると、子どもの被害の実態はもちろん、家族が抱える困難も浮き彫りになり、合わせて支援の盲点や制度の不備をも明るみに出され、私たちに問いかけてくる。

性的虐待は、想像を超えて多い

そんなことも念頭に、本書の編集に当たっては一つの趣向を凝らした。すなわち、抽出した事例を俯瞰し、そこから導き出される2010年代の虐待死の特徴をいくつかのトピックと



児童虐待対応件数の推移
政府統計をもとに作成

2024年度 223,691件

2005年度から法改正で、市町村も通告を受け、対応

2000年度 17,725件 児童虐待防止法 制定・施行

1990年度 1,101件

急増続く虐待件数 2024年度初めて減少。とはいえ高止まり

児童虐待対応件数

先頃、こども家庭庁から2024年度における児童虐待の概要が発表された。それによると、1990年度から虐待統計が計上されるようになって35年、児童相談所における虐待対応件数は、初めて前年度を下回った。ただし、その件数は22万件余、1990年度と比較すると二百倍を超えており、高止まりと言わざるを得ない。これを虐待の種類別に見ていくと、いわゆる「面前DV」(児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力)を含む心理的虐待が過半数を占めており、身体的虐待、ネグレクトがそれに続いている。

| 年度 | 性虐待件数 | 全件数 |
|------|-------------|---------|
| 2019 | 2077 (1.1%) | 193,780 |
| 2020 | 2245 (1.1%) | 205,044 |
| 2021 | 2247 (1.1%) | 207,660 |
| 2022 | 2393 (1.1%) | 214,843 |
| 2023 | 2473 (1.1%) | 225,509 |
| 2024 | 2520 (1.1%) | 223,691 |

* 福祉行政報告例から

一方、性的虐待は全体のわずか1%。こ

してまとめたのである。その1つに性的虐待の問題がある。驚かされたのは、参考例も含めて報告した24例のうち、性的虐待が認められた事例が8例も確認されたことだ。今回ピックアップした重大事件の多くは身体的虐待やネグレクトによるものであり、事例をまとめるまで性的虐待のことは意識していなかったのだが、それもそのはず、深刻な性的虐待を含めて、それらは死亡後に確認されたものがほとんどで、統計上は、どれ一つして性的虐待としてカウントされていなかった。そのため、性的虐待は、身体的虐待やネグレクトと違って外から見ただけではその有無を確認できない。加害者は、それをいいことに被害児を黙らせ、虐待行為を繰り返し、隠し通してしまう。

母親も性的虐待の加害者となっていた

子ども虐待対応の手引きには、性的虐待の例として、「こどもへの性交、性的行為」「こどもの性器を触る又はこどもに性器を触らせるなどの性的行為」「こどもをポルノグラフィーの被写体等にする」等を挙げているが、なかには母が自分の娘に性的虐待を加えている例もあった。いったいどういうことなのか。

例を挙げてみよう。家族は母と3人の娘。彼女たちはそれぞれ中学生、小学生、幼児である。母は、出会い系サイトで知り合った男性に自分の裸の写真を撮らせて金銭を得ていたのだが、男性が次第に興味を失うようになって悶いたのが娘たちのこと。金のため、3人の娘の胸部や陰部を露出させて男性が動画を撮影し、さらに中

学生の娘には男性の性器を口淫させ、性交もさせていたのである。本件は、母が別件で逮捕されたようやく露見したものだ。別の事例も見てみよう。母の知人女性2人が、小学校低学年の男児の下着を脱がせて下半身を撮影し、後日、その画像がホストクラブで笑いのネタにされた。母はそうした女性の行為を止める様子もなかったという。なお、児童虐待は保護者の行為に限定されているため、知人女性たちの行為は児童虐待と言えず、本件は、それを放置している実母のネグレクトとされる。とはいえ、子どもにとっては、大変な羞恥を感じさせる性にまつわる虐待であることは疑いない。

男児も被害を受けていた

今述べた例もそうだが、男児が被害に遭った事例も複数存在していた。たとえば、養父が中学生の男児に対して日常的に暴行を加え、最後は「24時間以内に自殺しろ」と脅して実行させた事例があった。養父が逮捕されて明らかとなったのは、暴力行為だけでなく、食事を制限し、バケツへ排泄させたり失禁させるなどのあらゆる形の児童虐待であり、その1つに母親のキャミソールを着せて写真を撮るといふ行為があった。性はプライバシーが最も守られなければならないことの一つであり、侵襲されると自尊心も激しく踏みにじられてしまう。思春期真っ只中の男児がキャミソールを着せられて撮影されれば、それが絶望感を感じる要因の1つになった可能性は否定できず、性的虐待の一つと言わざるをえない。

被害者が加害者にされていた

さて、性的虐待の典型例と言えば、やはり強制的な性交だろう。こんな事件があった。母子家庭の母が再婚し、相手男性は中学生の娘と養子縁組をした。と、すぐに性交を強要し、女兒は15歳で妊娠、出産してしまう。男性に口止めされて母に相談もできず、養育もできないことから、2人は出産直後に嬰兒を闇に葬ったのであった。本件が発覚しないことをいいことに、養父はその後10年以上に渡って性交を強要し、女性は何度か中絶した後、27歳で再び出産する。嬰兒は再び殺害されたが、それでも事件は発覚せず、最後は女性が自首して、2人はようやく逮捕される。ただし、遺体は養父が処理していたため発見されず、養父は事実を否認して釈放される。それでも警察は執念で捜査し、女性の供述をもとに10年以上前の最初の事件の遺体を発見して再逮捕、起訴となったのであった。結果、女性は懲役4年の実刑判決を受ける。

決して許されない性的虐待

「最初の事件は妊娠時15歳。養父の性交を拒むことは困難で女性に責任はない。しかし次の事件当時は成人しており、中絶も経験していた。手段を尽くして嬰兒の殺害を避けるべきであった。」
裁判長は量刑についてこのように説明したが、被害者が加害者になってしまう性的虐待は、決して許されるものではないのである。

第16回 「月ぬ美しや」「耳切り坊主」(沖縄県)

今年(二〇二六年)二月末の午前九時三〇分、沖縄県那覇市の首里城公園から程近い石嶺地区の住宅街にある「みどり保育園」を訪ねた。元園長の石川キヨ子さんが、園庭の一面に聳える巨大なガジュマルの樹木と一緒に迎えて下さった。

多数に分岐した幹が絡まり合いながら枝のように手を広げ、そこから無数の気根が垂れ下がっている。子どもたちが木登りをしたり、鬼ごっこや隠れん坊をしたりするのに打ってつけの遊び場だ。一方で、暗がりには妖怪キジムナーが棲んでいそうな気配もあった。第二次世界大戦末期の「沖縄戦」で、焦土と化したこの地で生き延びた生命力を持つこの「みどり」の樹に惹かれて、キヨ子さんは沖縄が本土復帰した一九七二年に「みどりご(嬰兒)」が集う「みどり保育園」を始めた。そして沖縄の昔話や子守唄やわらべうたを取り入れた保育実践を行なってこられた。



この日は、キヨ子さんが保育士さんと一緒に、年少から年長まで園児全員が参加する「わらべうた遊び」の設定保育の日で、沖縄地域児童文学協議会事務局長の山川喜美子さん、山川さんの姪御さんと一緒に見学させていただいた。

「うちなーぐち(沖縄言葉)」のわらべうた遊びの楽しさを身体じゅうで表現する園児たちと、キヨ子さんや保育士さんたちの躍動する姿に圧倒されたが、最後に、子どもたちのテンションが最高潮に達したところで、キヨ子さんは子どもたちに板張りの床の上に寝転び、目を閉じるよう指示した。それから八重山の子守唄「月ぬ美しや」を繰り返して歌った。「ホーイチョーガー ホーイチョーガー」。ゆったりとした時間が流れ、子どもたちは身体を横たえて、まどろんでいるように見えた。

「耳切り坊主」は子守唄の中で最もポピュラーなもので、沖縄全島に流布しており、さまざまなバージョンがあるが、ここには、この日の午後には聞かせていただいた平良京子さん(沖縄県子ども本研究会顧問)が参照された『沖縄のわらべ唄と子守唄31曲』版を掲載しておく。



ハイヨー ハイヨー ハイヨーハイ

夕方 市うーいーね

大村御殿ぬ御門なかい

(大村御殿の門に)

耳切り坊主ぬ立っちょよんど

(耳切り坊主が立っているよ)

幾人幾人立っちょよみせが

(幾人幾人立ってますか)

三人四人立っちょよんど

(三人も四人も立ってるよ)

何と何と立っちょよみせが

(何と何を立ってますか)



うだった。
「興奮したままで終わると、暴れまわったり走り回ったりする子が出てきます。そうならないように、最後に必ず子守唄を歌って、心と体を鎮めてあげるのです」と、後で話して下さいました。わらべうた遊びと子守唄が見事に融合した保育実践だった。

月ぬ美しや 十日三日

(月の美しいのは十三夜)

みやらび美しや 十七つ

(乙女の美しいのは十七歳)

ホーイ チョーガ

東りから上りおる 大月ぬ夜

(東から上る 大きなお月様)

沖縄ん八重山ん 照らしよーり

(沖縄も八重山も 照らして下さい)

(高洲義寛『おきなわのこともあそびうた』那覇わらべうた会二〇〇二年、39頁)



みどり保育園を後にして、首里城公園の北側に位置する「大村御殿」跡を訪ねた。現在、御殿の周囲の石垣だけが残っており、広い道路に面した場所に「耳切り坊主」の案内板が立っていた。次のように紹介されている。

「ここは、北谷御殿(のちの大村御殿)跡地で、わらべ歌「耳切り坊主」の舞台となった場所です。昔、妖術を使った悪事をはたらく黒金座主(クルガニザーシ)と呼ばれる僧侶がいました。噂を聞いた国王

泣ちゆる童ぬ 耳グスグス

(泣く子の耳をグスグス切るぞ)

んみんなが んみんなが 守いしかさわ

(お姉さんがお守りしてあげましょう)

定役 書役 しみゆんど

(首里王城の定役人や事務役人に出世させましょう)

唐ん 大和ん あつかさや

(唐や大和にも遊学させましょう)

下駄小ん さば小ん くますんど

(下駄やぞうりも買ってあげましょう)

ハイヨー ハイヨ 泣かんど 泣かんど

(だから 泣かないで 泣かないで)

(仲吉史子『沖縄のわらべ唄と子守唄31曲』なかしん出版一九八九年、13頁)

なかなか寝つかない赤ん坊に音を上げて、怖いお話を聞かせて何とか寝かしつけようとすると「脅かし唄」で、現在五十代である山川さんの姪御さんも、幼い頃によく聞かされて怖かったそうだ。それから彼女は次のようなエピソードも語ってくださった。同じ高校に大村家の末裔の男の子がいて、自分も幼い頃は「耳切り坊主」の祟りを避けるために女の子の格好をしていたという。そのため、写真がほとんど残っていないのだそうだ。少なくとも今から五〇年ぐらまでは「耳切り坊主」伝承の習俗が息づいていたのだ。

英国スコットランドにも、一九世紀頃まで上流階級の家では男子が生まれると、邪霊に連れ去られてしまう危険があると女装をさせる習俗があった。今も残る当時の富裕な家庭の子どもの肖像画はほとんど女子の容姿だという。洋の東西を超えて、同じ発想が受け継がれてきたのだ。

子どもの心と身体を安らかにさせる「月ぬ美しや」、子どもの心をざわつかせる「耳切り坊主」、二つの子守唄を上手に使い分けしていた沖縄のアンマー(お母さん)たちの知恵に感服する。

二〇一九年の火災で焼失された首里城正殿は、今年秋に復元作業が完成すること。その暁にはぜひ訪沖して、首里城公園でゆっくり過ごし、みどり保育園にもお邪魔したいと考えている。

連載

帯津良一

有り難き哉

お不動さんの豆蒔き



2026年2月17日をもって、満90歳になりました。さすがに、いささか感無量といったところ。まずは私の両親についてです。親父の享年は89歳。母親のそれは81歳です。二人の享年を超えたことになりました。酒好きの文学青年の雰囲気のある父親。商売熱心で太っ腹な母親分のような母親。どちらも大好きでした。この大好きなお二人を超えたのですから、これも親孝行のうちでしょう。ここでまずは、いささかの感無量です。

その上、これは毎年のことですが、2月3日には成田山川越別院が主催する、節分の追儺の豆蒔きに年男として出席することになっていたのです。私はもともと埼玉県川越市の出身で、川越別院の近くに住居がありました。物心がついた頃は、毎月28日のお不動さんの縁日という、父親に連れられてお参りに行き、帰路に福田屋書店に寄って、本を買ってもらうのが楽しみでした。

そして、都立小石川高校に進学してからは都内の生活が中心となり、お不動さまとも縁遠く

なっていました。たとえば、医学部の学生時代は大学の近くの正門前と西片町の下宿生活。卒業して医師免許証をいただいた途端に結婚し、以後は外科医の道をまっしぐら。気が付いたら、川越線の南古谷駅の近くに、「帯津三敬病院」を開設していました。1982年11月のことです。

当初は本来の西洋医学に中国医学を加えた、いわゆる中西医结合のがん治療を旗印にかかげた病院で、中国医学の指導は、1980年に訪れた北京市がんセンターでお世話になった李岩先生が、

「あなたの病院の中国医学は俺に任せろ」とばかりに何度となく川越にやって来る上に、私は私で、北京や上海などで開かれる学会や研究会にのべつ幕無しに出かけていくといった有様で、席暖まる暇あらずといったところでした。

そして、1987年9月に同志と語りあって、**日本ホリスティック医学協会**

を設立してからは、これもまたホリスティック医学一筋です。ホリスティック医学とは、からだ、こ

ろ、いのちが一体となった人間まるごとをそっくりそのまま捉える医学。

です。がんという病はからだだけの病ではなく、ころもいのちも深く関与した病であると考え、このころもいにこれに飛び付きました。と同時にホリスティック医学の治療を受けたという患者さんも三々五々やってくるようになったのです。

しかし、この時点で、ホリスティック医学はまだ一定の方法論を持ってはいません。とは言っても治療を希望する患者さんを徒に待たせるわけにもいきません。そこで、

からだに働きかける方法。主として西洋医学のところに働きかける方法。患者さんと治療者が寄り添い合って、ころを一つにする。いのちに働きかける方法。主として中国医学、サプリメント、ホメオパシー。そして養生法。

などについて患者さんと十分に話し合いながら、その患者さんに最も適した個性的な戦略を組み立てることにしました。

こうして病院の方針が軌道に乗って来るとともに、近くにお住まいの方々との交流も始まり、その方々のおすすめで、いつの頃からか成田山川越別院の豆蒔きに参加するようになり、その雰囲気にはだされで、すっかり常連になってしまったのです。さらに数年前に、成田山本山の総代に任命されたこともあり、川越別院との結び付きも、それは強固なものになりました。

今年も、大いに期待して豆蒔きの日を待ちました。ところが好事魔多しとはこのことか、二つの災禍に見舞われてしまったのです。一つは両手の甲にできた霜焼けです。因みに『広辞苑』によれば、霜焼けとは

強い寒気にあたって局所的に生じる軽い凍傷。赤くはれてかゆくることが多い。しもばれ。

これまでも何年間も冬になると霜焼けに見舞われていましたが、いずれもそれほどひどくはなく、治療をした経験はありません。それが今年、寒さが一際つよかったのか。見兼ねたわが軍の看護師さんが、

「先生！治療しましょう！」
と言って、両手の甲に副腎皮質ホルモン入りの軟膏を塗ってくれたのです。塗られてみて気が付きました。

これでは患者さんの診察は無理だな！と。私たちの診察には手を使う打診、触診は日常茶飯事です。手掌は軟膏が着いていなくても、軟膏でぎらぎら光っている手で患者さんのからだに触れるのが気が引けます。そこで軟膏は止めて、ホメオパシーで治療することにしました。

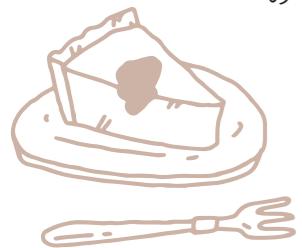
ホメオパシーとはドイツ生まれの代替療法で、植物、動物、鉱物などの自然界の物質を徹底的に稀釈して物質性を除いてエネルギーだけにしたものを患者さんの内なる生命場に作用させて、これを治療せしめるという、言わば癒しの方法です。わが国でも2000年の1月に学会が発足し、今ではホリスティック医学の一翼として大いに活用されています。

今回は

① アガリクス
(Agaricus Muscarius ヴニテンゲタケ)
② ペトロレウム
(Petroleum Rectificatum 石油)

の二種類のレメディ(Remedy 薬剤)を用いました。これは効きました。赤黒くカサカサしていた皮膚がたった一日で色褪せて滑らかになってしまったのです。まさにホメオパシーの威力です。そして、豆蒔きの前日の朝、起床とともに左足の親指が赤く腫れて痛いのです。痛風の発作であることはすぐにわかりました。というのは私はおよそ30年前に痛風の診断を受け、爾来、毎日、尿酸排泄促進剤を服用し、お酒類は特に制限なく、ただ鮫肝のような尿酸を多く含む酒の肴を控え目にして来ました。

それが、なんと30年振りの発作です。いやあ、おどろきました。お酒類について制限がないのは、酒好きとして当然といえは当然なのですが、鮫肝の登場は、ここに来て、



少しその頻度を増したようでした。そこで、霜焼けの例に倣って、ここでもホメオパシーを取り上げました。

① アルニカ
(Arnica Montana アルニカ(キク科))
② コルチウム
(Colchicum Autumnale イヌサフラン(ユリ科))

と。①はすべての外傷に用いられます。②は痛風とか関節リュウマチなどの関節痛に用います。

今度もよく効きました。豆蒔きの日の早朝は跛をひいていたのが、その夜にはほとんど痛みが消えていました。二度続けての著効です。あらためてホメオパシーの効果を痛感するとともに、わが内なる自然治癒力にも敬意を表したものです。いやいや、本当は、お不動さんの御利益だったのかもしれないね、来年も豆蒔きが、また楽しみになって来ました。

帯津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。
日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

